

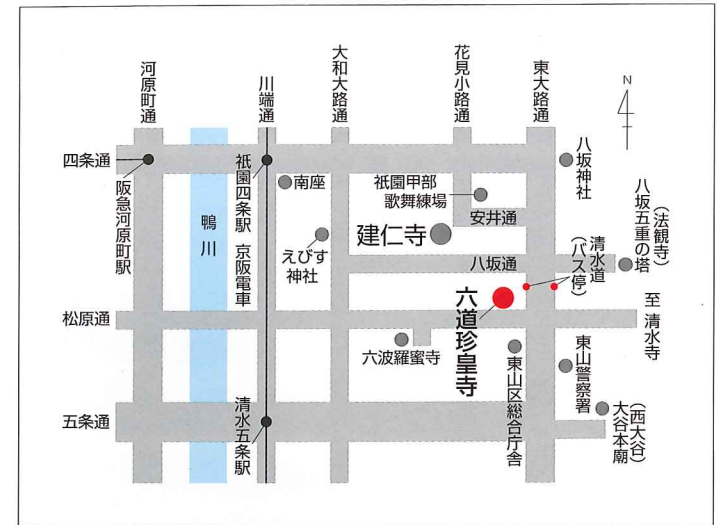


薬師如来坐像 (平安時代・重文)



題字 眞神 魏堂

大椿山
六道珍皇寺



交通案内

JR京都駅より

市バス206系統「清水道」下車 徒歩5分

京阪電車「祇園四条駅」より …… 徒歩10分

京阪電車「清水五条駅」より …… 徒歩10分

阪急電鉄「河原町駅」より …… 徒歩15分

精霊迎え 六道まいり
毎年 8月7日～10日(4日間)
午前6時～午後10時

水子の霊供養 六道の辻水子地藏尊
毎日受付 午後1時・3時供養(要予約)

大椿山 六道珍皇寺

〒605-0811 京都市東山区大和大路通四条下ル4丁目小松町595番地

TEL・FAX 075-561-4129

URL <http://rokudou.jp>

六道の辻

愛宕の寺も打ち過ぎぬ 六道の辻とかや
 実に恐ろしやこの道は 冥土に通ふなるものを
 心ぼそ鳥辺山 煙の末もうす霞む 云々

— 謡曲「熊野」より —



珍皇寺山門と門前「六道の辻」の碑



寺宝 熊野観心十界図(江戸初期)



閻魔大王坐像(小野篁卿作)

「六道」とは、仏教の教義でいう地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅(阿修羅)道・人道(人間)・天道の六種の冥界をいい、人は因果応報により、死後はこの六道を輪廻転生する(生死を繰返しながら流転する)という。

この六道の分岐点で、いわゆるこの世とあの世の境(接点)の辻が、古来より当寺の境内あたりであるといわれ、冥界への入口とも信じられてきた。

このような伝説が生じたのは、当寺が平安京の東の墓所であった鳥辺野に至る道筋にあたり、この地で「野辺の送り」をされたことより、ここがいわば「人の世の無常とはかなさを感じる場所」であったことと、小野篁卿が夜毎冥府通いのため、当寺の本堂裏庭にある井戸をその入口に使っていたことによるものであろう。この「六道の辻」の名称は、古くは「古事談」にもみえることよりこの地が中世以来より「冥土への通路」として世に知られていたことがうかがえる。

六道珍皇寺略縁起

京都では、「六道さん」の名で親しまれ、お盆の精霊迎えに参詣する寺として世に名高い当寺は、山号を大椿山と号し、臨済宗建仁寺派に属する。



珍皇寺本堂と「六道の辻」中心付近に建つ三界萬霊供養塔

当寺の開基は、奈良の大安寺の住持で弘法大師の師にあたる慶俊僧都で、平安前期の延暦年間（七八二年～八〇五年）の開創である。当寺は、古くは愛宕寺とも呼ばれた。

しかし当寺の建立には、諸説があり空海説（「叡山記録」ほか）や小野篁卿説（伊呂波字類抄・今昔物語集）をはじめ、一説には宝皇寺の後身説もある。宝皇寺とは、東山阿弥陀ヶ峰（鳥辺山）山麓一帯に住んでいた鳥部氏が建立した寺で鳥部寺とも呼ばれていたが、今はその遺址も明らかでない。

またさらには、承和三年（八三六年）の平安前期に当地の豪族であった山代淡海等が国家鎮護の道場として建立した（「東寺百合文書」）など、当寺の起源には多くの説がある。

この珍皇寺はもと真言宗で、平安・鎌倉期には東寺を本寺として多くの寺領と伽藍を有していたが、中世の兵乱にまきこまれ荒廃することとなり、南北朝期の貞治三年（一三六四年）建仁寺の住持であった閑深良聰により再興・改宗され、現在に至っている。

本堂には薬師三尊像（京仏師中西祥雲作）が安置されているほか、境内には閻魔堂（篁堂）、地藏堂、鐘楼等がある。また重要文化財の永久保存のために収蔵庫（薬師堂）には重文の本尊薬師如来坐像（平安時代）が安置されている。

精霊迎え「六道まいり」

魂まつり

ここが願いの

みやこなり

—服部嵐雪の俳句より—



六道まいりで賑わう山門付近

京都では、八月の十三日から始まり十六日の五山の送り火に終る盂蘭盆には、各家に於て先祖の霊を祀る報恩供養が行われるが、その前の八月七日から十日までの四日間に精霊（御魂）を迎えるために当寺に参詣する風習があり、これを「六道まいり」といふ。あるいは「お精霊さん迎え」ともいう。これは、平安時代このあたりが、墓所の鳥辺山の麓で、俗に六道の辻と呼ばれた京の東の葬送の地であったことより、まさに生死の界（冥界への入口）であり、お盆には、冥土から帰ってくる精霊たちは、必ずここを通るものと信じられたからであろう。

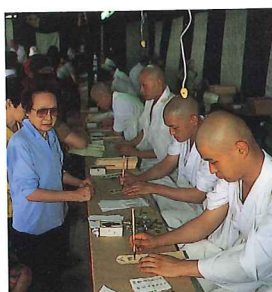
参詣にあたっては、境内参道の花屋にて高野槇を買い、本堂で水塔婆に戒名を書いてもらい、迎え鐘をつき、多くの石地藏がある境内、賽の河原と称するところにて高野槇の葉にて水塔婆への水むけ（水回向）をする。

そして古来より、精霊は槇の葉に乗って冥土より帰ってくるとされることより、購われた高野槇は、「おしらいさん」とともに、懐かしき我が家への暫しの里帰りとなる。

こうした美しい、宗派を越えた京のお盆習俗は、都人の厚き信仰のもとに千年の時空を越えて脈々と受け継がれ、今や、京洛の夏の風物詩ともなっている。



境内参道で高野槇を求める参詣者



本堂で水塔婆に戒名を書いてもらう参詣者



石仏前で水回向する参詣者

迎え鐘

金輪際 わりこむ婆や 迎え鐘

迎鐘ひくうしろより出る手かな

— 川端茅舎の俳句より —



由緒ある寺宝の「迎え鐘」

当時の鐘は、毎年盂蘭盆にあたって精霊を迎えるために撞くので「迎え鐘」という。

この鐘は、古来よりその音響が十萬億土の冥土にまでとどくと信じられ、亡者はそのひびきに応じてこの世に呼びよせられるといわれている。

この鐘は当寺の開基である慶俊僧都が造らせたもので、あるとき僧都が唐国に赴くにあたり、この鐘を三年のあいだ地中に埋めておくようにと寺僧に命じて旅立ったが、留守を守る寺僧は待ちきれず、一年半ばかりたつて掘り出して鐘をついたところ、はるかに唐国にある僧都のところまで聞こえたので、僧都は「あの鐘は三年間地中に埋めておけば、その後は人手を要せずして六時になると自然に鳴るものを、惜しいことをしてくれた」といつて大變残念がったという。「古事談」



先祖の霊を呼び戻すという「迎え鐘」を撞く参詣者

珍皇寺と小野篁卿の不思議な伝説

わたの原 八十島かけて

漕ぎ出でぬと

人には告げよ あまのつり船

小野篁 流刑地の隠岐へ

流されるときに詠んだ歌

— 小倉百人一首より —



篁堂に安置する衣冠束帯姿の小野篁卿立像(江戸時代)



冥界より出口「黄泉がえりの井戸」



冥界への入口「冥土通いの井戸」

こうした話しは「今昔物語」巻三十一にも同巧異曲でみられるが、このような唐土にまでひびく鐘なら、おそらく冥土までも届くだろうと信じられ、かかる「迎え鐘」となったと伝えられている。そしてお盆の期間中には終日、まさに地の底へ響くような音色で、多くの精霊たちを冥土より晩夏の都へと迎え入れるのである。

小野篁卿(八〇二年〜八五二年)は参議小野岑守の子。嵯峨天皇につかえた平安初期の公卿で、武芸にも秀で、また学者・詩人・歌人としても知られる。文章生より東宮学士などを経て閣僚級である参議という高位にまでなった文武両道に優れた人物であったが、不羈な性格で、「野狂」ともいわれ奇行が多く、遣唐副使にも任せられたが、大使の藤原常嗣と争い、嵯峨上皇の怒りにふれて隠岐に配流されている。また、なぜか閻魔王宮の役人ともいわれ、昼は朝廷に出仕し、夜は閻魔庁につとめていたという奇怪な伝説もある。かかる伝説は、大江匡房の口述を筆録した「江談抄」や「続群書類従」の小野氏系図、「今昔物語」「元亨釈書」等にもみえることより平安末期頃には篁卿の、閻魔庁における冥官伝説がすでに語りつたえられていたことがうかがえる。

今なお、本堂背後の庭内には、篁卿が冥土通いに使ったという井戸があり、近年、隣接民有地(旧境内地)より冥土からの帰路に使ったと伝わる「黄泉がえりの井」も発見された。また、井戸のそばには、篁卿の念持仏を祀った竹林大明神や小野愛宕権現の小祠がある。